

院内ホスピタル・ロジ高度化へ、 東大病院がRFIDで動態調査

～東大大学院“ホスピタル・ロジスティクス講座”の取組み～

本号「旬のマテリアルフロー」でハイライトを紹介した東大大学院ホスピタル・ロジスティクス講座／東大病院の取組み。以下にはその本編として、詳細レポートをお送りする。

初めに同講座の研究目的と過去3年にわたる活動内容を述べた上で、今回実施されたアクティブRFIDシステムによる人と物資の院内動態調査について、結果とその意義を報告したい。
(編集部)

病院を巡る物流サービス向上を目指して

前稿でも触れたが、このホスピタル・ロジスティクス講座は、佐川急便の寄付講座として東京大学医学部附属病院22世紀医療センター内（東京都文京区本郷）に2004年度に開設された。寄付講座のトップの客員教授は、東京海洋大学教授でもある苦瀬博仁氏、研究目的は「病院における効率的なロジスティクスシステムの構築」である。

ホスピタル・ロジスティクス講座では「ホスピタル・ロジスティクス（病院におけるロジスティクス）」を、
・医療・看護活動を支える医薬品や医療材料の供給
・患者や院内スタッフの利便性向上のための物流サービスの提供
と定義している。

通常のロジスティクス概念は、拠点・施設間、企業間、国と国など大きな物の流れの最適化を指すことが多いが、ここでは病院という1施設

を軸に、①外部から病院へ、②病院から外部へ、③病院内、という3つの視点で物資の最適供給を追求しようとしていることに注意したい。

一般的な施設と病院を比較したとき、そこに求められるロジスティクスには図表-1のような違いがある。

ホスピタル・ロジスティクス講座では人やモノが頻繁に動き回っている病院の中で、病院スタッフがこうした物流サービス高度化へのニーズを把握するとともに、物流分野の学術研究者・物流業者という3者が協

力。それぞれの立場から問題に向き合って知識・経験を活かし、産学連携の共同研究でより実情に沿った物流サービスへの向上、そのためのシステム構築について検討・研究しようという試みだ。

研究の舞台となる東京大学医学部附属病院（以下、東大病院）は言うまでもなく本邦有数の大病院で、1日の平均来院者数は3,000人以上、入院患者数も1日あたり1,000人以上に及ぶ。薬剤・医療材料はもちろん日用品、寝具・衣類などリネン類、食品、さらに廃棄物まで、治療と関係者の日常を支える大量の物資供給・排出の物流規模は、前言の通り1つの「街」レベルと考えてよい（図表-2）。

そのうちホスピタル・ロジスティクス講座が取り上げている具体的な研究テーマは、以下のようなものだ。

(1) 入退院患者や通院患者のための「手荷物配送・物品調達・医薬品配送」サービス

図表-1 一般的な施設と病院で求められるロジスティクスの特徴比較

	一般的な施設 (商業施設・オフィス等)	病院 (医薬品について)
輸送	定時性重視	安全・品質管理重視
保管	コスト重視	未欠品重視
流通加工	顧客のニーズに合せ加工	患者の症状に合せ加工
包装	マーケティング主体	医療・看護主体
荷役	主に納品業者が実施	主に納品業者が実施